

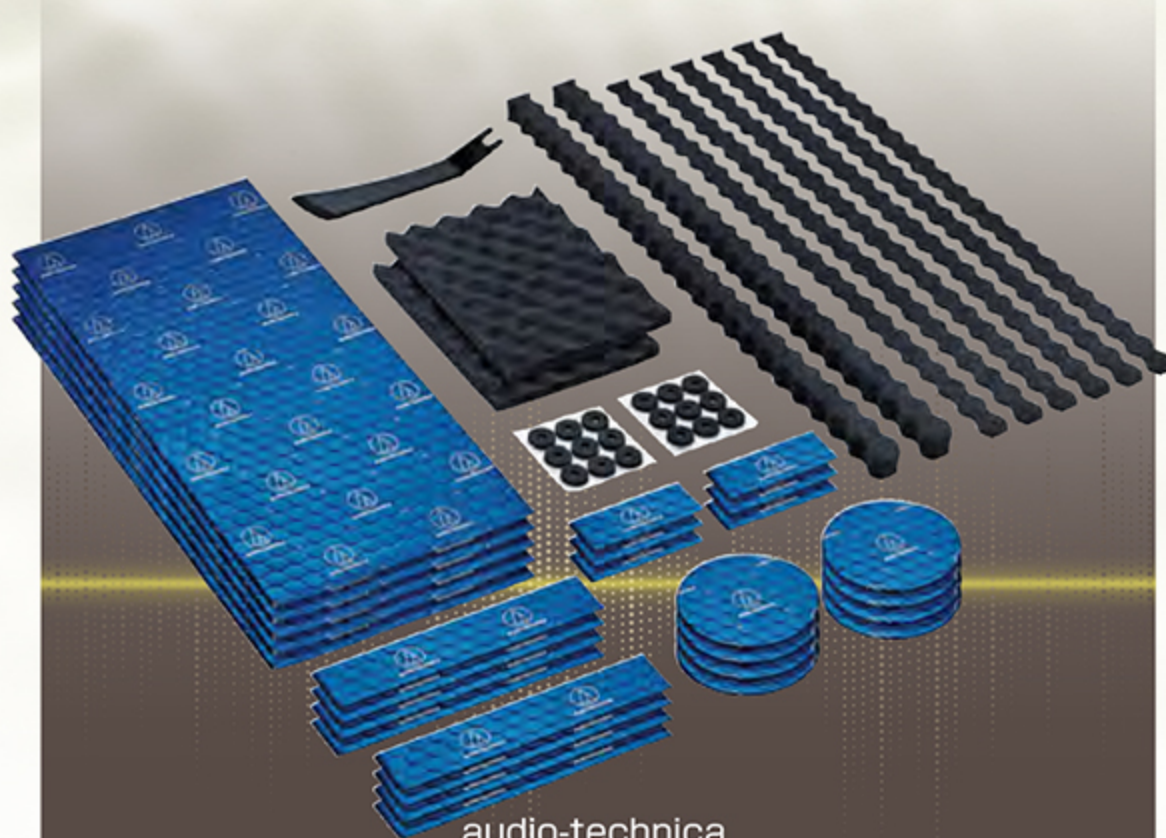
カーオーディオ一直線!! 探究 @ 高音質

見えないものを探究するふたつの製品に迫る

不思議なことなのだが、上質なオーディオで音楽を聞いていると、オーディオのことだったり、スピーカーのことだったり、それらの存在がゆっくりと消えていってしまう。残るのはただの音楽と息づかいだけなのだ。

オーディオという機械の存在感から離れ、ただの音楽に浸れる体験こそが高音質の体験なのだと思う。ここではその目に見えない高音質の探究にとって欠かせない、スピーカー技術とドアチューニングの技術を紹介しよう。

まとめ：松永大演 写真：前田恵介



audio-technica
ドアチューニングキット
AT-AQ405

クルマのドアは、必ずしもスピーカーをマウントするのに最適とは言えない。むしろ逆で、自動車メーカーはできるだけ軽くしたいのだから、がっしりと振動を抑えていることは少ない。カーオーディオにとってドアはエンクロージャー（スピーカーボックス）であり、ここがしっかりしていなければいい音などでない。だから対策を施すのだ。



carrozzeria
カスタムフィットスピーカーVシリーズ
TS-V174S

サウンドの最終的な出口となるのがスピーカー。電気信号がコイルを振動させコーン紙を震わせて音を発生する。しかしスピーカーのマウント部分の共振やコーン紙の変形などをしっかり対策しないと、正しい信号のままの音は出すことができない。果たしてどのような対策が講じられているのだろうか。

身近に存在する音すら再生は難しい

高音質とはどういうことなのか？ よくオーディオの目標は「ハイファイ」と言われるが、それはHigh-Fidelity（ハイフィデリティ）のこと。オーディオ業界では、高忠実度あるいは高忠実再生と訳されるもので、元の音源をどれだけ忠実に再生できるかを追求することだ。決して迫力ある音を出すことでも、今まで聞いたことのない音を出すことでもない。あくまでも、ありのままに忠実に。必要なのは、音の質と速さ、音の量、そして音が出ている位置。ある意味、今聞いている周囲の音がありのままスピーカーから出せることが求められる。

例えば、コンピューターに向かっている人なら、キ

ーボードを叩く音。それほど大きくはないが、左手の音は左側、右手の音は右側に聞こえる。それも目の前から音が出ている。また、ドアを開ける音、閉める音。ここには予想以上に重低音が潜んでいたりする。自然界である以上、音楽でも同様。あるいはそれ以上に音を駆使する。こんな高く弱い音から、低く強い音、あるいはその逆に高く強い音から、低く弱い音。早く止まる音、ずっと余韻を残す音。そんな様々な音をスピーカーによって再現することが、ハイファイオーディオに繋がっていくのだ。

しかし、最も大切なこと。それは出口をしっかりと固めることだ。しっかり固定されていたり、ビビらなかつたりすることで、やっと本来の音が出せるのだから。ここではその出口の取り組みを2件紹介していこう。